

大陸(南支)

農民か兵隊かわからない中国軍

長崎県 宮崎 佐 十

私は長崎県南高来郡有明町大三東戊二四一一に大正十一年六月八日に生まれました。

男として生まれた以上激化する大東亜戦争に、日本の勝利のためにこの身を捧げたいと、毎日奮い立っておりました。次々と我が村から(当時大三東村でした)出征されていく先輩が羨ましくなりませんでした。

昭和十八年四月十日、願いかなって入隊することに なりました。大三東駅頭で見送ってくださった家族や村長さんをはじめ国防婦人会の皆様の激励に、涙を流

しながら「日本の勝利のため、必ずこの身を捧げ頑張ります」と、振ってくださいった日の丸の小旗、万歳万歳の声に向かって叫びました。

私が入隊したのは、福岡県小倉市北方にあった歩兵第一二三連隊でありました。毎日激しい訓練が行われました。叩かれ殴られ、大きな声で叱られ、これで戦争ができるかと、それはそれは死に物狂いの訓練でした。そのうち南方に行くらしいという噂がたちはじめました。

いよいよ戦場に行くかと思うと、不思議に嬉しさに身震いしました。昭和十八年六月二十五日、小倉を出発しました私共は、近くの門司港から乗船し出帆しました。私の部隊からは初年兵十四人でした。次第に遠ざかる九州の山々を見ながら、もう一度と日本に帰っ

てくることはあるまいと思うと、思わず涙がポロポロと流れました。

何処に行くのだろうかと不安に思いながら五日目、アメリカの潜水艦がうろうろしているので危険だと、七月一日台湾の高雄港に急遽入港し、一時上陸することになりました。

七月四日、高雄港にて乗船、直ちに出發し東支那海を中国に向けてフルスピードで走りました。アメリカ軍の潜水艦に発見されないようにと走りました。乗船しております私共も、いつ魚雷攻撃を受けてもいいように、「油断大敵」と覚悟を決めてお互いに頼むぞと語り合い、緊張の連続でした。

その間に敵軍に一矢報いずして死んでたまるかと神に祈りながらの二日間、六日無事九龍港に到着しましたが、目的地は他にありと、上陸は許されませんでした。

十日未明九龍港出港、わずか一日にして仙頭港に着、直ちに上陸して独立歩兵第一〇〇大隊に転属を命ぜられ、潮陽付近の守備に当たりました。

初めて見る中国（南支那）の山々、広々とした平原、中国人は農民なのか兵隊なのか全く見分けがつかません。独立歩兵第一〇〇大隊は四個中隊で編成され、潮州に本部がありました。

十月七日、磨石山付近の戦闘に参加しましたが、私共の中隊が陣地に近づくこと逃げてしまつて敵兵の姿は発見できませんでした。九州男兒の強い軍隊と敵さんも知つて、パンパンと銃を撃つてきますが、突撃しますと一人もいないという状況の繰り返しでした。

しかし十月一日から二日にかけての大背嶺の戦闘で大山班長以下二人が敵弾にやられた時は「畜生」と思わず悔し涙がでました。

三人の戦死者を火葬しながら手を合わせご冥福をお祈りし、「班長殿、きつと仇は取ります。残った者を見守つて下さい。ご冥福を祈ります、さようなら」と、口々に涙声で叫びました。

一緒に突撃しながらシュンと小銃の弾丸の音がしたと思つたら、ぱったりと倒れ息絶えていく戦友の姿を見た時、さっきまでは「負けてたまるか」とニコリ

笑っていたのに、なんとむごいことかと、全身に闘志がみなぎって、無我夢中で撃ちまくりました。いつの間にか敵が逃げ去った後、横たわっている戦友に抱きつき、名前を呼びましたが返事は返ってきませんでした。「これが戦争か、人間が人間を殺し合う、なんと哀れなことよ」と、やるせない気持ちで一杯でした。

昭和十九年一月十五日、銀河付近の戦闘に参加しましたが、敵兵は私共の襲撃を察知すると、蜘蛛の子を散らす様に逃げてしまう。時折見かける農民の姿は、この連中ではないかと思えますが軍服を着用してないので無茶なことではできません。世にいう便衣隊、すなわち新四軍の姿だったと後で気付きました。

七月二十一日より八月八日まで湘桂作戦に参加しましたが、九州兵が来ると分かると姿を隠してしまいました。時折ビュルンビュルンと迫撃砲弾が飛んでくるのが不気味に聞こえ、自分のところに飛んでくるようで、何度地面に伏せたかわかりません。私は衛生兵の訓練を受けていましたから、歩兵でありながらも最前線で見守る機会が少なく、むしろ負傷してくる兵隊の看

護をすることが多かったのです。幸い島原から先輩が二人おられましたので、種々のご指導を頂き、相談もできましたので助かりました。

八月九日より十一月七日まで湘桂作戦第二期に参加しましたが、警備が主目的で、激しい戦いはありませんでした。ただ困りましたのは不寝番の時、突然電話がかかってきたことです。その内容は隣の中隊が夜襲を受けているとの報告でしたが、早口なので報告されるのを聞き取ることができませんでした。何を言っているのかわからないのです。

幸い当直将校がすぐ側におられたので「分かりません、代わって聞いてください」と言いますと、「よし渡せ」と言われ、受話器を渡しますと、咳込んだ声で話が始まりました。後で聞きますと、隣の中隊が夜襲を受けて苦戦しているとの報告だったということでした。内地も地方ではまだ電話がなく、私は電話をとった経験がありませんでしたから、大切な電話を受信することができず、申し訳ないやら、恥ずかしいやらで困りました。

食料事情は幸いにして困ることはありませんでしたが、学校の壁等には反日抗戦の絵が書かれ、一般大衆に反日感情を激しく宣伝していました。戦では激しい敵襲はありませんでしたが、繰り返しの敵襲で、その度ごとに交戦の連続でした。

昭和二十年三月中旬、広東地区の警備に当たることになりました。広東には飛行場がありましたので、度々空襲も受けました。短期間ではありましたが、広東の陸軍病院勤務を命ぜられ、第一線から後送されてくる負傷兵や病人の看護にも当たりました。

外出の許可もありましたが、ほとんど買う品もなく、酒保にある品物を買うのが精一杯でした。朝鮮の兵隊も四人ほどおりましたが、終戦になりますと行方不明になりました。

幸い軍事郵便は出せましたので、内地へ便りを出すことも、また内地から来ることもありました。

このころは海上も危険で、朝鮮から北支、中支、南支へと陸路經由で補充部隊がきました。

衛生兵とは申せ歩兵部隊ですから、中隊の病人の看

護をしながら、中国兵に負けてたまるかと、銃剣術の訓練の毎日でした。何しろ相手が農民か兵隊か分かりませんし、いつどのように襲ってくるのかわかりませんので、一瞬の油断もできません。敵襲の報に「それ行け」と飛び出すことも度々ありましたが、中隊長が立派な方でしたから、我が方の被害は少なくとも減りました。

私共兵隊には戦況がどのようになっているのか全く分かりませんでした。

広東地区を警備して、日本軍の被害を少しでも少なくする。ただそれだけで毎日訓練を続けてきました。ただ一部の人が中国人と接する度に、その態度が少しずつ変わってきたなあ、あの横着ぶりはただごとではないぞと感じてきました。スパイ活動が素早い中国人だから、これは何かあるぞと聞いたことはありません。軍務に一生懸命の私共には、その理由は分かりませんでした。八月十五日、思いがけない終戦の詔勅にびっくりしますと共に、戦争に負けた残念さに男泣きに泣きました。勝つことのみを信じて一生懸命努力してき

たのにと思えますと残念でなりませんでした。情報察知に早い中国人の態度が変わったのは、日本軍敗戦の情報が飛び交っていたのでしょう。知らぬは自分たちばかりで、ほんとうにみんな泣きました。

様相が一変しました。威張っていた私共が中国兵から使われる身になったのです。九月二日現地では停戦協定が締結され、兵器は全て放棄させられ、中国軍の俘虜になってしまいました。途端食物も変わりました。今まで食事に困ることはありませんでしたが、粟がゆに変わり、腹も空き腹になるし、立場が全く変わってしまいました。俘虜としての仕事は川の護岸工事・作業でした。「勝てば官軍、負ければ賊軍」という言葉を今更ながら思い知らされました。

支那大陸から南方へと、勝った勝ったで戦線を上げ、負けた戦争は知らされていなかっただけに、必勝を信じていたのに、いまは中国兵から作業を強いられるのが残念でなりませんでした。労働は無理な仕事ではありませんでしたが、無念でなりませんでした。

あんなに訓練に張り切っていたのに、何と哀れな毎

日の生活であろうか、戦争に負けた者の惨めさをしみて感じました。それと同時に内地の人達はどうしているのでしょうか、果たして日本に帰ることができらうかと、お互いの話題はそのことばかりでした。

故郷に残してきた家族の安否、旗を振って送ってくれた人達のことを思い浮かべながら涙がホロホロ流れました。日本はどうなるのか、仕事をしながら頭から去ることはありませんでした。死ぬ覚悟で出てきたものの、一日たりとも故郷のことは忘れませんでした。昭和二十一年三月二十一日、日本に帰るとの報は夢のようでした。一同の喜びは収容所をひっくり返すようでした。船はアメリカから借用したリバティー号に、広東地区の兵隊約二千余が乗船し、広東港を出ました。日本に近づくにつれ鹿児島が見えてきました。「鹿児島が見えたぞ」と一同大喜びでした。船は鹿児島を見ながら北東へと進み、四月一日浦賀港に到着し、上陸が始まりました。日本に帰ってきた、その喜びと共に、戦友と別れるのが辛くなり、涙を流し再会を期して別れました。

四月四日、故郷に到着し家族と会いました。戦争は二度としてはならないと、戦死した人達のことを思い起こし、深く心に刻みました。併せて、いまの平和に感謝しております。その平和の陰に如何に多くの人命が失われ、多くの人々の犠牲が払われているかを、いまの若い人々はご存知であろうか……。農民になり、その農民が銃をとり、兵隊となって祖国を守ろうとする愛国心に頭の下がる思いです。

日本の若い人達も平和を守り、祖国を大切にして頂きたいと、心から願っています。

「陸軍三等兵」として南方で

現役軍人として南支防衛

石川県 浅江 喜佐雄

私は大正十四年一月十二日生まれで、平和祈念事業特別基金から銀盃が届けられたのは、丁度七十二歳の誕生日である平成九年一月十二日でありました。

「あなたの先の大戦における旧軍人軍属としての御苦労に対し衷心より慰労します」との、「内閣総理大臣 橋本龍太郎」の書状が添付されていました。

今次大戦の当時、私は船舶輸送業務に従事しておりましたが、次のことが常に脳裏から離れず、自責の念にかられていたのです。それは、輸送中、傷病患者二十人くらいが行方不明になったこと、輸送物資を半分くらい海中に捨てたこと、機関銃をジャングルの山中に隠したことなどがあつたからであります。

そのため、今回の書状・慰労品には、ただただ恐懼感激しているところであります。私も、孫が二十歳を過ぎたので、これを機に、二十歳時代の戦争体験をお話ししたいと思います。

昭和十七年後半から、昭和二十一年五月復員するまでの約四年間、祖国日本のため、太平洋のソロモン海から、南支那大陸を駆け巡ったことなどを細かく申し上げたいのですが、手元にはこれといった資料（昭和十八年九月二十日、乗船が爆沈し、日記、私物一切流出）もないので、日時、場所の不確定な点は御容赦い